

大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法 ：三隅一人教授退職記念論集

<https://hdl.handle.net/2324/7388815>

出版情報：大学院からはじめる社会学研究：問いを鍛える作法：三隅一人教授退職記念論集，2025-10-01．三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン：
権利関係：



『大学院からはじめる社会学研究—問いを鍛える作法』

はじめに

本書は表題が示すとおり、大学院から社会学研究を始める学生を主に念頭においた、いわば研究作法の論考集である。

社会学とは、社会を対象にする学問であるが、社会のどういう側面をどのようにみるかについてはさまざまなアプローチがあり、拠って立つ理論枠組みも一様ではない。学部で社会学の訓練を受けていれば、ある程度全体的な見取り図をもちながら卒論研究で自らのアプローチを考える機会がある。けれども学際的な大学院の場合、学部で社会学を系統的に学ぶことなく、大学院から社会学的研究を進めることが少なくない。別の学問分野を専攻しつつ、社会学的観点を導入した研究展開を行うこともある。いずれの場合も出口は専門社会学とは限らないが、社会学的研究ないし社会学的観点を謳う以上、それなりの専門性が問われる。限られた修業年限のなかで、効率的に、自らの（できればそれ自体がオリジナリティをもつ）社会学的アプローチを打ち立てていかなければならない。本書はそのプロセスを「問いを鍛える」という側面から捉え、それを共通の枠組みとして、多様な社会学的研究の導きを具体的に示すものである。

どんな学問分野で研究するにせよ、研究は問いに導かれる。問いの内容はもちろん研究する者が自分で考案するものだが、問いの特定化のレベルにはある程度共通した枠組みがある。主要なレベルは、ある事柄に対する原初的な疑問や問題意識、それをある学問分野において意義ある問いとして落とし込んだリサーチクエスション、そして、リサーチクエスションの実証ないし解釈的妥当性の検証のために特定化された仮説的な問い、である。こうした特定化が、直線的に1回限りの流れで進むことは希である。文献レビューしながら問いの理論的な置き所を修正したり、データや事例と付き合わせるなかで問いそのものを見直したり、といった試行錯誤が続く。原初的な問いに照らして社会学的観点の導入がほんとうに必要なかつ有効なのか、といった問い直しもあり得るだろう。「問いを鍛える」とは、こうした試行錯誤のプロセスを示している。こうした試行錯誤を、より見通しがよく、より実りあるものにするための研究遂行上の留意点が、「問いを鍛える作法」である。

本書の執筆者は、九州大学の学際大学院である地球社会統合科学府（旧：比較社会文化学府〔研究科〕）において、私、三隅が主査として学位審査に関わった博士修了の皆さんや、大学院ゼミで修士課程から長くともに勉強した修了生の皆さんにお願いしている。大学院から本格的に社会学に踏み込んだ経歴の方も多く、研究テーマも社会学に限らず多様である。そうした多様な立場からの実体験をふまえて、問いの模索、行き詰まりと見直し、理論的な特定化における葛藤、問いとデータの往還など、通常の研究論文では書きにくいことを含めて、「問いを鍛える作法」を例解いただいた。読者は、テーマや問いのレベルに留意しながら、どこからでも自由に読み進めてほしい。

なお本書は、私、三隅が2025年3月をもって九州大学を定年退職するにあたって、修了生の皆さんと一緒に企画した記念論集である。企画・編集に加わっていただいたすべての皆さんに、記して感謝申し上げたい。退職記念論集のため、在学中のゼミの思い出や、私の指導に対する有り難いお褒めの言葉やお叱りが、混在している。一般読者にとっては余計な内容かもしれないが、「問いを鍛える作法」はゼミの社会的文脈と無縁ではないので、寄稿いただいたすべての論考を、内容を割愛したりすることなく掲載することにした。

現代社会が抱えるさまざまな課題の解決は、社会学に限らず、1個の個別的な専門分野だけでなしうるものではない。九州大学大学院比較社会文化研究院そして地球社会統合科学府は、まさにそこで求められる学際的な研究・教育を推進することを目的としている。そこで長く研究を行い、教鞭を執る機会をいただいたことで、本書の執筆者のような多様な学生と社会学という枠を超えて議論しあうことができ、専門に閉じない社会学研究を進めることができたと思う。この場をお借りして、九州大学大学院比較社会文化研究院・地球社会統合科学府そしてすべての関係の方々にも、感謝申し上げたい。

2025年8月吉日

三隅 一人